

POINT OF VIEW

「図書館とは？」を求め海外視察②



谷口 とよ美

海外の図書館は、その国や地域の文化を継承し、そのアイデンティティを表現しようとする意識、それぞれの文化の個性を表現しているところが多い。日本では地方、地域に根付く、個性豊かな図書館づくりに向かおうとする意識が自覚め始めたところではないだろうか。

くりにおいて、どこに行っても同じ本が並び、同じようなレイアウトの金太郎あめの図書館づくりにようやく疑問を持ち、地方、地域に根付く、個性豊かな図書館づくりに向かおうとする意識が自覚め始めたところではないだろうか。

今回、海外の図書館を見て、地域に必要な図書館づくりは、技術の進化、革新は積極的に取り入れ、自家薬籠中の物として、地域の人々が気軽に、積極的に資料やその場所を利用する図書館づくりを目指すべきである、あらためてそう感じた。金太郎あめのような図書館づくりは、デジタル化の時代を迎え、必ず近い将来、シチョウ(四)の行き詰まりが来るとの確信を持った。

まんのう町立図書館で8月中旬に行った顧客満足度調査では「スタッフの対応満足度」が98%という高い数字となった。地域に根差した、そして未来に向けてつねに進化をめざす図書館づくりへの賛同ととらえ町民の皆様とスタッフに感謝とエールを送りたい。

その外観は、世界中の文献を収集することを目的とし、古代最大にして最古の学術の殿堂とも、最高の図書館とも言われているアレクサンドリア図書館をイメージした、韓国国立デジタル図書館は、地下1階から地下5階、非図書館は400万点、一般書庫は800万点の収容が可能であり、デジタル閲覧室には一般PC2502台、編集用PC20台、予約用PC10台などが並ぶ壮観であった。タッチパネル式新聞閲覧台は、紙の新聞をめくる感覚で、見開きのデジタル化された新聞を閲覧でき、紙の新聞の15倍の利用がある。利用の中心は、50代から60代。韓国の図書館におけるデジタル化は日本に比べてはるかに進んでいると感じ

た。隣接する韓国国立中央図書館とともに、「知の集積」の場所として、膨大な書籍を所蔵し、加えて、両図書館とも、随所に自国の文化の継承を意識したと思われる意匠が見られた。一方、アムステルダム中央図書館は総面積が2万8000㎡とヨーロッパ最大の公共図書館として、その建築思想において注目を集める図書館である。ここでもRFID技術の導入による貸出返却の自動化、セルフ化は当然の機能として導入されていた。アムステルダム中央駅からほど近いこの図書館はライブミュージックでも話題を集める。各フロアをつなぐエスカレータの踊場のデジタルサイネージには、プロのライブミュージックの

宣伝広告が大きく出されていた。私が訪問した当日も夕方7時半ごろからホランティアのコーラスグループによるライブがエントランスホールで開かれて広い建物に響く、賑やかだが、温かみのあるコーラスに多くの来館者が足を止め、聴き入っていた。最上階にあるレストランと共に、人が集い、賑わいを生むポイントでもあるようだった。国立図書館と市立図書館の違いはあれ、どちらの図書館も、その国や地域の文化を継承し、そのアイデンティティを表現しようとする意識、それぞれの文化の個性を表現する象徴としての図書館づくりを目指す意識が表れていると感じた。国内に目を転じたとき、それぞれの地域の図書館づくりに

たにくち・とよみ リフ ネット社長。三重県生まれ。三重県職員などを経て02年1月リフネット設立。13年ミライトグループに